

俳句と漢詩とのかかわり

——芭蕉・蕪村・一茶俳句新考——

朱 實

はじめに

- 1 漢籍と関連のある芭蕉・蕪村の句
- 2 漢籍と関連のある一茶俳句新考
むすびに代えて

はじめに

本誌前号（第27巻第2号）では俳句と漢俳の交流を中心に、中国における俳句の受容および俳句の漢訳、漢俳の和訳、さらには今後の課題などについて、実作例を引用しながら論述した。

本稿では漢籍と関連のある芭蕉・蕪村・一茶の俳句について探求してみた。

1 漢籍と関連のある芭蕉・蕪村の句

松尾芭蕉は、西行の和歌、宗祇の連歌を師とし、また、中国の古典文学にも精通し、唐代の詩人李白・杜甫・白居易や宋代の詩人蘇東坡の詩文に傾倒していた。その博識ぶりは敬服に値する。

芭蕉は延宝3年（1675）32歳の夏、江戸に来た西山宗因の俳席に列し、「桃青」の号を用いている。延宝8年（1680）冬、はじめて深川の芭蕉庵に入

る。門下の^{りか}李下が中国から渡来した芭蕉という植物を植えて興趣を添えてくれたので、それが庵名となり「芭蕉庵桃青」の称呼ともなった。「桃青」（もも・あお）の俳号は、李白（すもも・しろ）を意識して名づけられたものであると言われている。

(1) 『奥の細道』における漢詩

『奥の細道』の冒頭の「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」は、李白の「春夜、桃花園に宴するの序」の冒頭——「^{それ}夫天地者^は万物之逆旅にして、^は光陰者百代之過客なり。」をふまえて、李白の感じた人生有限・無常を、奥の細道への旅立ちのまくらとしたのである。

また、矢立の初めとして詠んだ

行く春や鳥啼き魚の目は^{なみだ}泪

は、下記の杜甫の五言律詩・「春望」の^{がん}頷聯をふまえている。

感時花濺淚　時に感じては花にも^{そそ}涙を濺ぎ
恨別鳥驚心　別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

(2) 「秋十年却って江戸を」の句

秋十年却って江戸を指す故郷

この句は、芭蕉が東海道の旅に出ようとして、顧みて今出で立とうとする江戸の地に残す心の動きを詠じたもので、賈島の「桑乾を渡る」と題する次の詩をふまえている。

客 舍 并 州 已 十 霜	へいしゅうに客舎してすでに十霜
帰 心 日 夜 憶 咸 陽	帰心日夜咸陽を憶う
無 端 更 渡 桑 乾 水	はしなくも更に渡る桑乾の水
却 望 并 州 是 故 郷	却って并州を望めば是れ故郷

この詩は、久しく并州（今の山西省太原）に赴任していた作者が、さらに官命によって、北方に向かう折りに、桑乾河を渡って、并州を振り返って眺めた時の感慨を詠ったもの。“并州の片田舎に旅寓することもう十年にもなり、日夜、都の咸陽（長安）に帰りたと思う心の起らない日とてなかったが、はからずも桑乾河を渡って北の方へ行かなければならなくなり、住みなれた并州を振り返って眺めると、却って今は故郷のようになつかしく思われる”という意味である。

『甲子吟行』のはじめに収録されている掲句は、29歳の時に故郷の伊賀を出て江戸に上った芭蕉が、40歳の時に故郷を経て、大和路を探ろうとして江戸を出発した折りの作。

賈島の詩をふまえるというより、引用していると言った方がいいかも知れない。結句はほとんどそのまま引用されている。

蕪村が唐詩を熟読玩味してそれを俳諧の道に応用したことは、その俳句を貫く詩歌または文章を見ても明らかである。蕪村は弟子の召波に、俳諧とは何かと質問され、「俗を用いて俗を離れるのが俳諧であり、そこに到達するには、努めて漢詩の教養を積むべし」（『春泥句集』序）と答えている。蕪村の漢籍に対する真髓がうかがえる。

(3) 「柳散清水涸」の句

遊行柳のもとにて
ちりし みずかれいしところどころ
 柳散清水涸石處々 (『蕪村句集』)

「遊行柳」は栃木県那須、つまり下野芦野の里にあるもので、西行の和歌「道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ」、芭蕉の「田一枚植て立去る柳かな」の句で有名。

その前書によって、名高い遊行柳は散ってしまい、西行が「清水流るる」と詠んだ道のべの清水も今や涸れて、川床にところどころ石が露出している、という晩秋の荒寥を描いた句意がうかがえる。

後年に書かれた「自画賛」によると、この句は、蘇東坡の「山高月小、水落石出」（後赤壁賦）の詩句によって着想を捉えた、蕪村の漢詩調開眼の画期的な一句であると言えよう。

(4) 「易水に葱流るる」の句

えきすい ねぶか かな
易水に葱流るる寒さ哉 (『蕪村句集])

この句は、初唐の詩人^{らくひんのう}駱賓王の「易水送別」と題する次の詩を翻案して作られたもの。

此地別燕丹	此地 ^{えんたん} 燕丹に別かる
壯士髮衝冠	壯士 ^{かんむり} 髮冠を衝く
昔時人已没	昔時 ^{すで} 人 ^{ぼつ} 已に没し
今日水猶寒	今日 ^な 水猶お寒し

易水は、中国戦国時代に燕国の西境を流れていた川、今の河北省保定の付近を流れて白河に合流する。戦国の昔、燕国の太子^{たん}・丹が、秦王・政（後の始皇帝）を暗殺させるため、^{けいか}荆軻という刺客を易水のほとりまで見送った。

荆軻と燕丹の離別のありさまは、『史記』の刺客列伝に詳しい。自分を理解してくれる人のために命を投げだすというのは、戦国の世に生きる刺客たちの共通の心情であり、論理であった。当時の最強の権力者たる秦王の命を

ねらう以上、もとより生還は望めない。送別の宴席で、荆軻は次のように歌ったという。

風 蕭々 兮 易 水 寒 風蕭々として易水寒し
 壯 士 一 去 不 復 還 壯士一とたび去って復た還らず

見送る者みな目を怒らし、頭髮が逆立ち、冠を突き上げたという。

暗殺は失敗し、荆軻は秦王の面前で殺された。一人の壮士として、己れを知る者のために死んでいった荆軻の悲愴な行為は、乱世に身を置く政治家や文学者にとって、常に身近なものとして意識されていた。この詩の作者駱賓王は、当時の権力者則天武后そくてんぶこうを倒して唐王朝を回復しようとした行動的な詩人である。彼にとって、現実の易水における友人との離別は、そのまま、遠い戦国の離別につながっていたのかも知れない。“あれから幾百年、いにしえの人々はみなすでに姿を消し、今日、わが目に入るものは、寒むぎむとした変わらぬ易水の流れのみ。” 同じく眼前の風景に触発されながら、熱血の詩人駱賓王は、自己の慷慨を古人の行為のうちに見出している。

上述のような故事典故を自家薬籠中のものとし、ここに葱をもって来たのは蕪村の手柄である。中国の北方の人はネギやニンニク類を生で食べることを好むから、易水の畔で宴を張ったさままで連想され、寒さがひしひしと人に迫るものがある。

2 漢籍と関連のある一茶俳句新考

桜楓社から『蕪村事典』に続いて『一茶事典』が1995年10月に刊行されることになり、筆者はその参考篇・翻訳文献一覧の中で、中国語訳の編纂を担当した。その過程において、中国の古典や漢文学・漢詩と関連のある句が一茶には多々あることに興味を覚え、考証を試みたことがある。

(1) 「張良たのむ此沓を」の句

橋涼し張良たのむ此沓を^{このくつ}

文政2年(1819)歳旦から文政4年(1821)年末に至る3年間の句日記——『八番日記』に収録されている句である。

張良の話は、『史記』の『留侯世家』および『漢書』の『張良伝』に詳しく見える(留侯とは張良の封ぜられた大名の名)。何れも漢の高祖・劉邦の参謀長ともいふべき張良の伝記である。

『史記』巻五十五所載の『留侯世家』を現代風に抄訳すると次のようになる。

張良^{あぎな}、字は子房。父祖五代にわたって、韓^{かん}の国の宰相であった。韓の国が秦^{しん}の始皇帝に滅ぼされたので、良は秦に対しあだ討ちをはかった。

あるとき、東方の海岸地方で滄海君という賢者に出会い、勇氣と力のある意気盛んな力士を得ることができた。そこで良は重さ120斤およそ27キロもある鉄錐をつくった。秦の始皇帝が東方に遊幸した際、良はその力士とともに始皇帝をつけねらい、博浪沙^{はくろうさ}で襲撃したが、鉄錐は誤って副車^{あた}に中った。始皇帝は激怒し、極力犯人を天下に搜索し、その追及はなはだ急であったが、良は姓名を変え、下邳^{かひ}(江蘇省邳県の東方)に逃げ匿^{かく}れた。

ある日、良は間^{ひま}を見て散歩し、下邳の圯橋^{いきょう}(圯は土橋)のほとりまで行つたところ、一人の老父^{としより}がおり、身に粗服をまもっていたが、良のところへ来てわぎと、はいていた履^{くつ}を橋の下に落とし、良をふりかえって「孺子^{わかぞう}、下りて履^{くつ}を拾^{くつ}って来てくれ」と言った。良は愕然^{がくぜん}として、余程老人を殴ろうと思ったが、我慢し、橋の下に降りて履^{くつ}を拾った。すると老父は「わしに履^はかせてくれ」と言った。良は拾^{くつ}ってやったのだからと、跪^{ひざまず}いて履^はかせた。老父は足でそれを受け、笑って去った。良は驚きあきれ、目送している、老父は1里(半キロ弱)ばかり行って、また引返して来て言った。「孺子^{わかぞう}、教えてやる

ことがある。5日後、朝早くここで会おう」と。良はふしぎに思いながらも跪いて「承知しました」と答えた。5日後、夜明けに良が出かけて行くと、老父はすでに来ていた。そして、「老人と約束しながら、^{おく}後れて来るとは何事だ。帰れ」と怒って言ったが、帰るとき「5日後、また朝早く会おう」と言った。5日後、良は鶏鳴の時刻に行ったが、老父はすでに来ていた。そして、「わしに後れるとは何事だ。帰れ」と、また怒って言ったが、帰るとき「5日して、もう一度、朝早く来い」と言った。5日後、良は夜中にならぬうちに行った。しばらくすると、老父が来て、嬉しそうに「こうでなくちゃいかん」と言い、一編の書巻を取り出して「これを読めば、王者の師となるだろう。10年後に興起し、13年後に^{おまえ}孺子はわしに会うだろう。^{さいほく}濟北（山東省濟水の北）の^{こくじょう}穀城山下の黄いろい石がわしなのだ」と予言して去り、再び姿を見せなかった。夜が明けてから、その書を見ると、周・文王の参謀で有名な太公望の兵法であった。良は暇さえあればそれを誦読した。

10年後、農民戦争が起きた時、良は若者百余人を集めて、劉邦（後の漢の高祖）に帰属し、しばしば太公望の兵法を用いて劉邦を助け、天下統一に貢献した。漢の6年の正月、高祖が功臣を封じた時、高祖は「^{はかりごと}籌策を^{いあく}帷幄の中に^{めぐ}運らし、勝利を千里の外で決したのは、子房（張良）の功である」と言って、張良を留侯に封じた。

老父から太公望の兵書を与えられてから13年後、張良が高祖に従って濟北を通過した時、果して^{こくじょう}穀城山下の黄いろい石を見たので、持ち帰って、宝物として^{まつ}祠った。留侯の死後、この黄いろい石をも葬り、6月と12月の塚まつりのたびに、黄いろい石を祠った。

以上が『史記』の『留侯世家』に記されている張良と黄石公の物語である。

明らかに一茶はこの物語を熟知し、それを自家薬籠中のものとして、掲句を詠んだのである。その博学達識ぶりには驚嘆させられるものがあると言えよう。

ちなみに、李白の五言古詩『経下邳圯橋懐張子房』（下邳の圯橋を経て、張子房を懐う）は、元来、男だてを好む李白が、張良の遺跡を通りかかり、特に感慨を触発されて作った詩で、

我 来 圯 橋 上	我圯橋 <small>ほとり</small> の上に来り
懐 古 欽 英 風	古 <small>いにしえ</small> を懐 <small>おも</small> うて英風 <small>きん</small> を欽 <small>あこ</small> みず
唯 見 碧 流 水	唯 <small>ただ</small> 見る碧流の水
曾 無 黄 石 公	曾 <small>かつ</small> て黄石公無し
嘆 息 此 人 去	嘆息す此の人（張良）去って
蕭 条 徐 泗 空	蕭条として徐泗（下邳地方一帯）の空 <small>むな</small> しきを

と詠嘆している。

高井蒼風著『俳諧寺一茶の芸術』（行政通信社、昭和53年1月初版）の資料編「俳諧寺一条年譜」によれば、天明7年（1787、一茶25歳）「此年すでに葛飾派の俳人二六庵竹阿に入門。12月、連俳の秘書『白砂人集』を小林圯橋の俳名で筆写する」とある。

この圯橋という俳名は、『史記』や李白の詩など漢籍に精通していた一茶が、張良と黄石公の物語をふまえて用いたものと見るべきであろう。

(2) 「涼風に月をも添て」の句

涼風に月をも添そえて五文哉

『七番日記』に収録されている句である。

この句は李白の「襄陽歌」に見える次の句をふまえている。

清 風 朗 月 不 用 一 錢 買	清風朗月は一錢の買うを用いず
玉 山 自 倒 非 人 推	玉山 <small>おのず</small> 自から倒るは人の推 <small>お</small> すに非ず

「襄陽歌」は、安陸^{あんりく}（湖北省）より西 200 キロにある風光明媚な襄陽を訪れた時に作った詩。詩と酒を生涯のよき友とした李白の処世態度・人生観がすでにここに現われていることは注目すべきである。

李白は、その生涯をほとんど旅人として送っている。唐・開元 13 年（725）、25 歳の時に、李白は故郷の四川をあとにして、遍歴の旅に出る。

第 1 回の遍歴期は、およそ 16 年間の長いあいだ続く。今の湖北・江西・安徽^き・浙江・山西・山東の各省にわたる広い範囲で、中国の東半分のおもな場所に、その足跡を残している。その中で最も長く逗留したのが湖北省の安陸である。

李白は安陸を中心に約 10 年間各地を遍歴し、安陸では、李白自身は意に満たない生活であったかも知れないが、詩の面においては相当の力量を持つようになり、ようやく円熟してきた時代のようである。安陸を中心に各地を遍歴し、すばらしい風景に接し、新しい人生経験をしたことが、李白の詩風を成熟させたものと言えよう。

李白は神仙の境地をいつも夢みており、自由な、解放された境地を絶えず望んでいた。儒教では死後の名誉のことを言うが、それもいらぬ。仏教では死後の世界を言うが、それも考えない。現在の自由に生きる生き方こそ願わしいと考えていた。

死後のことは心配しても、仕方がない。やはり生きている現在を楽しむべきであり、「それは一銭も必要としない清風であり朗月である」として、「清風朗月は一銭の買うを用いず」「玉山^{おのず}自から倒れるは人の推^おすに非ず」と歌い、自然の風景を楽しむことこそ、すべての憂いを忘れさせてくれるものであるとする。

晋^{しん}の「竹林七賢」の一人嵇康^{けいこう}は、酔って倒れると、「玉山^{くず}の頽れるが如し」と、そのさわやかな酔態がたたえられたが、李白も「他人が推して倒れるのではなく、玉山がおのずから倒れるように、さわやかに酔いつぶれたいものである」と歌っている。美しい自然の景色と酒があれば、自分の人生に他に

求むべきものは何もない李白の酒仙ぶりが、実にほほえましい。

「清風朗月は一銭の買うを用いず」と歌った李白の詩をもじって、一茶は、「涼風に月をも添て五文哉」と詠んだのである。この句は、文化7—15年の9年間の句日記——『七番日記』に収録されている。一茶の48歳から56歳までの時期で、句風がさらに洗練・拡充され、旺盛な作句活動が展開された。この9年間の総句数は7300句、年平均800句を超える。質量共に一茶の生涯で最も充実した時期であり、一茶調の最高潮期と言ってもよい（丸山一彦校注、新訂『一茶俳句集』岩波書店、1991年12月第1刷）。

掲句は李白の詩をもじり、句法も軽妙自在で、漢籍に精通し、俳諧一筋に生き抜いた一茶の面目躍如たるものがある。

むすびに代えて

漢籍と関連のある芭蕉・蕪村・一茶の俳句について探求したが、これはほんの一部にすぎない。

学問には限りがない。日本の学問の歴史を考えると、最も早くから形成されたのは“漢文”系の学問、即ち中国古典系のそれであり、そこに“和文”系、即ち日本古典のそれが重なり、最も遅れて“欧文”系、即ち西洋古典のそれが加わった、というのが実態であろう。洋の東西を問わず、諸外国のすぐれたものを採り入れて、吸収・消化し、それに付加価値をつけて発展させるのが、日本民族の特長であるように思われる。俳句と漢詩とのかわりにも同じようなことが言えるのではなからうか。

現代俳句については、何れまた、稿を改めて探究することにしたい。

(1994年初春、今嶺寓居にて)

〔参考文献〕

- 1) 司馬 遷著『史記』
- 2) 尾形 侑著『芭蕉・蕪村』花神社、1978年

- 3) 山下一海著『戯遊の俳人・与謝蕪村』新典社, 1986年
- 4) 松浦友久著『中国詩選 三〈唐詩〉』社会思想社, 1988年
- 5) 井出 大著『芭蕉・蕪村と中国詩人』銀河書房, 1988年
- 6) 松尾靖秋ほか編『蕪村事典』桜楓社, 1991年
- 7) 永田龍太郎著『評釋 蕪村秀句』永田書房, 1991年

〔前稿の訂正〕

* 本誌第27巻第2号所載の拙稿「中国における俳句の受容」中に誤植があったので、お詫びして訂正いたします。

(1) [134 ページ, 14 行目]

誤： 随^レ行講師兼副^レ会長 → 正： 随^レ行講師兼副^レ団長

(2) [140 ページ, 19 行目]

誤： 飛^レび花 → 正： 飛^レぶ花